年　組　名前

道新でワークシート

札幌圏 わがまち元気企業

コードデザイン
＝札幌市西区

ドローン撮影 高い技術

建設、測量分野へ進出狙う

創業から12年目、従業員数11人の小さなドローン撮影会社ながら、取引先には東京のテレビ局やインターネット通販大手など名だたる企業名が並ぶ。自らもドローンを操る創業者で社長の佐々木大志郎さん(52)は「ゴルフなど自分の得意分野と業界の需要がうまく合致した。専門性や撮影技術をより高め、業界で生き残っていきたい」と話す。

佐々木さんはスキーインストラクターやゴルフ場のスタッフとして約10年、サッポロテイネスキー場（手稲区）などに勤務。31歳のころに社内の業務変更で、ウェブデザインの担当になり、ホームページ（HP）の作成などを一から独学で学んだ。

ウェブデザイナーで独立を考えた時期とドローンの普及期が重なったのが転機だった。2011年にHPの制作会社を立ち上げ、同時にドローンで撮影した映像を自社のHPで公開し始めた。他社が手がけていなかったゴルフ場の空撮に独自で取り組んだところ、「北海道 ドローン」などのインターネット検索から首都圏のテレビ局などの目にとまり、北海道ロケで呼ばれる機会が増えた。「首都圏のテレビ局やCM制作会社が求める品質やバリエーションはとても厳しかった。早い時期に鍛えられたおかげで高品質なものを安定して提供できるようになった」と胸を張る。

道内では主に5～10月に撮影の依頼が集中する。知床やニセコなどの旅番組で呼ばれる機会が多いほか、最近はドラマのオープニング映像などの仕事も多い。

ただ、競合他社が増え続けており、ドローンを活用した新たな収益源を模索する。特に将来有望とみるのが建設など産業分野への進出だ。橋の点検では、人が近づきにくい橋桁の裏側など、高い操縦技術で接近した撮影を可能にする。また、1台600万円ほどのレーザー計測器を導入し、空からの測量分野への進出も狙う。「誰もが手軽にドローンを使える世の中になりつつあり、単に撮影できるだけでは淘汰される。より難しい撮影や、専門機材を活用して、当社に仕事を頼みたいと思われる会社になりたい」と意気込む。

（安沢悠太、石垣総静）

総額1千万円を超えるドローンを前に「初期投資はかかるが、個性的な映像が撮影できるのが魅力」と話す佐々木社長

2022年4月25日（月）　朝刊　札幌市内版　15ページ（記事は再編集しています）

①見出しには「ドローン撮影 高い技術」とありますが、佐々木社長は、自分がドローン撮影の高い技術を身につけることができた理由をどのように考えていますか。３０字程度で書きなさい。

②佐々木社長が建設、測量分野へ進出を狙う理由として適当なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　自分の興味のある分野で、新たなことに挑戦したいから。

イ　橋の点検や撮影など、産業分野からの依頼があったから。

ウ　競合他社が増え続ける中、新たな収益源を模索しているから。

エ　これまで身に付けた技術を生かせば、手軽にできると思ったから。